

## 【翻 訳】

# 同盟中央指導部のケルンへの移転

カール・オーベルマン著  
(橋本直樹訳)

### 【訳者はしがき】

本稿は、Karl Obermann, *Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten 1849-1852*, Berlin 1955の第3章 Die Verlegung der Zentralbehörde des Bundes nach Köln, S.36-52の試訳である。(執筆者名のカナ表記については、オーバーマンの方がより原音に近いように思われるが、表題においては、ドイツ語の原綴字を想定し易い従来の表記に従った。)訳文中の [ ] 内の数字は底本のページ数であって、各ページの開始箇所にはほぼ相当する文節等の切れ目に置かれている。/ /内の数字は、共産主義者同盟史に関する旧DDRの主な論文を取めた *Bund der Kommunisten 1836-1852*, hrsg. v. Martin Hundt, Berlin 1988に本章が収録された際のページ数である。注記は後者——通し番号の脚注——に倣った。初出時には未公開であったが、1988年までには公開されていた典拠資料が補われているからである。典拠資料の補足について、本訳稿では編者の意向を忖度し記載の仕方を出来る限り統一した。Landeshauptarchiv Brandenburg から StA Potsdamへのこの間の文書館の異動も反映されているものようである。

参照文献等、原語を残すのが種々の点で便宜と思われる場合は、それを転記するに留めた。必要に応じて ( ) 内に原語を示した。[ ] 内と \*印に続く文言は訳者の補足であ

る。

本論文は、下記のようないくつかの問題がありはするものの、表題のテーマに関しては最初の研究と言ってよく、現在でも顧みる必要のある研究資料であり、あえて試訳を試みた所以である。すぐにも指摘できる問題は、例えば脚注13における考証などは、もしエンゲルスの中に呼びかけのオリジナルがなく、彼も黒書を利用したものとすれば——そして、その可能性は高いと思われるが——、オーバーマンのそこでの考証は成立しなくなる。また、レーザー陳述の評価についても、脚注7の記載にもかかわらず、フェルダーによる次のような批判がある。すなわち、レーザー陳述は「それがなければわれわれがほとんど、あるいはまったく何事さえも知りえないような全体について、部分的に非常に豊富な陳述を含んでいる。他の資料との詳細な対比によって認識させられるのは、この供述が、多くの点での資料的な豊富さにもかかわらず、まったくもって信頼を置けないことであり、若干の——一部はまさに極めて重要な諸場面で——まったく真実に反する主張をしていることである。この信頼を置けないことは、記憶違いの問題に帰せられるべきはほんのわずかの程度にすぎず、むしろ本質的にはペーター・ゲルハルト・レーザーがまだドイツに残っている同盟員をかばい自分自身をそれ以上の重

罪にしないために相当程度努力したことに帰せられるべきである。」(Förder, Herwig: Zu einigen Fragen der Reorganisation des Bundes der Kommunisten nach der Revolution von 1848/49. In: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, Nr. 4, Berlin 1978, S. 24 [ヘルヴィツヒ・フェルダー(拙訳)「1848/49年革命後の共産主義者同盟の再組織の若干の問題について」(上), 若手マルクス・エンゲルス研究者の会『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第2号, 1988年1月, 83ページ]; *Bund der Kommunisten 1836-1852*, S.253.)

[36]/76/ 1850年夏に、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスはロンドンで徹底して学問的な研究を行い、経済的發展と政治的發展との間の関連についての問題を明らかにし、それとともに労働者階級の状況および課題についての新たな判断に到達した。他方で、キンケル、ヴィリヒ等々のような急進的に振舞う民主主義的小ブルジョアジーおよび小ブルジョア革命家たちは騒々しい革命予言を行った。エンゲルスは1869年にマルクスに関するある論説のなかでこう書いた。すなわち、「当時ロンドンには大陸のあらゆる国々の亡命者の精華 [fine fleur]<sup>1</sup> すべてが集まっていた。あらゆる類の革命委員会、すなわち、国外に形式的にのみ存立する [in partibus infidelium]<sup>2</sup> 連合政府、臨時政府が形成されたし、あらゆる類の闘争と諍いがあったが、それに関与した紳士方は今ではきつこ

の時期を彼らの生涯のうち最も不毛な時期であったと回顧することであろう。」<sup>3</sup> 小ブルジョア革命家たちは1848/49年革命が敗北した原因の研究に理解を示さなかった。彼らは革命綱領を立案し、その中で彼らはとりわけ小ブルジョア層に約束した。詩人のゴットフリート・キンケルは「ドイツ国民基金」という一人よがりの名称を用いた革命基金の計画を持ち出していた。拠出金額以上に証書が発行されたが、そこでは基金を利用して [37] つくり出されるはずのドイツ共和国が返済義務を負うことになるのであった。ヴィリヒはこの革命基金の宣伝に関与した。キンケル、ヴィリヒ等々のためにイギリスおよびアメリカにいる1848年の亡命者すべてが革命基金騒ぎのただなかに突き落とされた。

ヴィリヒおよび彼の支持者たちによるこのような革命遊びの上には、活動能力があり独立したいかなる労働者党をも築けはしなかった。革命遊びは同盟にとって危険であったため、1850年9月15日に77/ヴィリヒ/シャッパー派と分離する事態になった。それについてレーニンはこう書いた。すなわち、「1848/49年の革命の時期が終わったときに、マルクスはあらゆる革命遊びに反対し(シャッパーとヴィリヒおよび彼らに対する闘争)、外見上は「平穩に」新たな革命を準備するための新たな時期に活動しているということを理解するよう求めた。」<sup>4</sup>

マルクスがロンドンの中央指導部の会議でヴィリヒ/シャッパー派から分かれるために与えた理由付けには同時に共産主義者同盟の今後の活

<sup>1</sup> Schöne Blüte.

<sup>2</sup> Außerhalb des Landes; nur dem Schein nach bestehend.

<sup>3</sup> Engels, Friedrich, Karl Marx, in: Marx/Engels/Lenin/Stalin, Zur deutschen Geschichte, Bd. 2, Berlin 1954, S. 857. [MEW, Bd. 16, S. 364]

<sup>4</sup> Lenin, W. I., Karl Marx, in: Derselbe, Karl Marx — Friedrich Engels, Berlin 1953, S. 44. [『レーニン全集』第21卷(大月書店, 1957年)65ページ]

動方針が含まれていた。すなわち、「少数派は、批判的な見方の代わりに教条的な見方を持ち、唯物論的な見方の代わりに観念論的な見方をもつ。少数派にとっては、現実的な関係の代わりに単なる意志が革命の動輪になる。われわれは労働者たちに、諸君は、諸関係を変えるためばかりではなく、諸君自身を変え、政治的支配の能力を得るためにも、15年、20年、50年にもわたる内乱および人民戦争を経なければならぬ、と言っているのに対して、諸君は反対にこう言う。つまり、「われわれはすぐにも支配に就かなければならぬ。さもなければ、われわれは寝てしまってもかまわない。」われわれは、特にドイツの労働者たちにドイツのプロレタリアートが未発展な状態にあることを指摘するのに対して、諸君は、なるほどより大衆受けするものではあるが、ドイツの手工業者の国民感情と身分的偏見にあまりにも見え透いた形でおもねっている。民主主義者たちが人民という言葉で神聖な存在にするように、諸君はプロレタリアートという言葉で神聖な存在にする。[38] 民主主義者たちのように、諸君は革命的発展を革命という空文句にすり替える。』<sup>5</sup>

ヴェリヒ／シャッパー派は今や完全に小ブルジョア民主主義者たちもしくは俗流民主主義者たちの考え方に陥ってしまい、その活動は、小

ブルジョア民主主義者たちの活動とまったく同じく、間近に迫っていると称する革命を騒々しく予言することに限られていた。

さらに、1850年9月15日のロンドン中央指導部の会議においては、6対4の票数で次のように決定された。

「1. 中央指導部の所在地をロンドンからケルンに移転し、ケルン地区に新たな中央指導部を構成させること。

2. 同盟の規約の廃止を表明し、新たな中央指導部に新たな規約の起草を委任すること。』<sup>6</sup>

この決定がケルンの同盟班指導部に伝えられたのは1850年9月後半、特使ヴィルヘルム・ハオプトによってであった。ハオプトはロンドンを発って、故郷ハンブルクに戻る旅をした。(ハオプトは1851年5月の逮捕後に裏切り者となった。) /78/ 同盟のケルン地区指導部とフランクフルト地区指導部との緊密な共同作業を物語るのは、1848/49年に『新ライン新聞』の編集者であったハインリヒ・ビュルガースがハオプトの到着の翌日に早くもフランクフルトのヨーゼフ・ワイデマイヤーに宛てて経過および決定について伝えるために手紙を書いたことである。<sup>7</sup>

[39] ワイデマイヤーがこの通知を受け取った後(ケルンからの知らせの他にも彼はロンドンからも直接に伝えられていた)、彼は1850年10

<sup>5</sup> Marx, Karl, Enthüllungen über den Kommunistenprozeß zu Köln, Berlin 1952, S. 39. [MEW, Bd. 8, S. 598に相当]

<sup>6</sup> Radus-Senkovic, Aus der Geschichte des Bundes der Kommunisten, Sept. 1850 — Aug. 1851 (russ.), in: Voprosy istorii, 1948, 11; ZStAM, Anklageschrift, Rep. 77, Tit. 505, Nr. 16, Acta betr. der im Jahre 1851 in Cöln entdeckten communistischen und revolutionären Umtriebe, vol. 2.

<sup>7</sup> StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Tit. 94, Lit. R, Nr. 208b, Acta des Polizei-Präsidii zu Berlin, betr. Verhandlungen in Folge Anerbieten des Cigarrenmachers Röser der Regierung Entdeckung über Communistenverbindungen zu machen, 1949 — 1853. — 紙巻煙草職人ペーター・ゲルハルト・レーザーはケルン共産党裁判における彼の有罪判決の後、確かに1853年12月および1854年1月の尋問に際してであったが、そのような詳細について陳述を行った。陳述はしかしながら当時、それ以上の損失をもたらすことはあり得なかった。予審においてレーザーは共産主義者同盟についても陳述したが、名前を挙げることは拒んだ。レーザーはとりわけ、労働者として拘留中にきわめて激しく責め立てられた。しかしながら、彼は警察の手先にはならなかった。Vgl. ebenda, Nr. 208, Acta betr. den Cigarrenarbeiter Röser in Köln 1851 — 1857.

月13日にマルクスに宛ててこう書いた。「ちなみに同盟の分裂は非常に致命的であるにしても、エンゲルスがそれについて懸念しているように思われるほどの拡がりはないだろう。というのは、同盟中央指導部の移転は君たちに可能であった最善の決定であって、当地のどこでもその決定には満場一致の賛成があった。シャッパーが自分の影響力をいささか過大評価したことは疑いない……」<sup>8</sup>

労働者たちや手工業職人たちと真剣に議論し、彼らにカール・マルクスの科学的学説の知識を与えるのにくらべれば、彼らに誇張した言葉で、彼らは革命まで決して長く待つ必要がないと告げ、彼らにおもねるのが、もちろんはるかにたやすいことであった。J. W. スターリンはこう述べる。「言うまでもないことだが、ブルジョア・イデオロギー、すなわち労働組合主義的意識は、思想の普及だけを問題にするならば、はるかに容易に広まるのであり、自然発生的な労働運動を、歩み始めた社会主義的イデオロギーよりもはるかに広くとらえるのである。」<sup>9</sup>

ワイデマイアーがこの点から労働者を組織する際に経験しなければならなかったことについて、彼は同じ手紙の中でこう伝えた。すなわち、「多数の労働者にいったいどのように [40] 働きかけるべきか。というのも当地では彼らを一度たりとも協会に、少なくとも真剣な討議を行うような協会に、入れることができないからだ。われわれの小さいけれども徹底して

断固たる態度をとる協会ではそもそも真剣な討議をするのが私には骨折りでないということは……」<sup>10</sup>

しかし、1850年末から1851年初めにかけて /79/労働者階級の最良の代表者たちが口先ばかりの革命家である小ブルジョア民主主義者たちに幻滅しはじめた兆候もある。労働者階級の著名な指導者たちは、1850年3月の中央指導部の呼びかけの意味で、労働者協会の独立性を目指す必要を理解しはじめた。この理解がきわめて明瞭に現れているのは、1830年から1848/49年まで革命的闘士であり、後に第1インターナショナルのドイツ支部の組織者となるヨハン・フリリップ・ベッカーが1851年2月6日にジュネーヴからパリに送った手紙である。そこにはこうある。すなわち、「私は確かに私の出来る限りのことを行った。下へ向けて活動し、ドイツの労働者協会との私の結びつきを改めて新たなものとしたりした。また私はこのようなことがどんな組織にとっても最も本質的なことであると思う。とりわけ民主主義者たちの結びつきは普通は虚空を漂っているが、基盤があつてこそはじめて根付くことができるからである。労働者なしにいったいなにを望むことができようか。闘争はただ彼らのためにのみあり、したがってただ彼らによつてのみなされるのだから！」<sup>11</sup>

共産主義者同盟の活動はこの「最も本質的なこと」に集中した。同盟のケルン班は、ロンドンにおけるロンドン中央指導部の最近の諸決定

<sup>8</sup> 未公開書簡、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン研究所（モスクワ）〔1850年10月13日付マルクス宛ワイデマイアーの手紙、MEGA<sup>2</sup>, III/3, S. 655-659; BdK, Bd. 2, S. 294-297〕。

<sup>9</sup> Stalin, J. W., Kurze Darlegung der Meinungs verschiedenheiten, in: Derselbe, Werke, Bd. 1, Berlin 1953, S. 83f. [「党内の意見の相違について簡単に」]『スターリン全集』第1巻（大月書店、1952年）120ページ]

<sup>10</sup> 1850年10月13日付カール・マルクス宛ヨーゼフ・ワイデマイアーの手紙 [BdK, Bd. 2, S. 295]。

<sup>11</sup> StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Lit. W, Nr. 188, Acta des Polizei-Präsidii zu Berlin, betr. Berliner Wochenberichte, vol. 2, 1852. それにはこの手紙がパリのヘルファー（Hörfer）のところで押収されたことが書き留められている。

あるいはマルクスおよびエンゲルスの指示の実現に取りかかった。そのさい、彼らには [41] フランクフルトのワイデマイアーの全面的支援があった。『新ドイツ新聞』が禁止されてしまったあと、彼は同盟の活動に以前よりもはるかに熱心に尽力するようになった。マルクスおよびエンゲルスの長年にわたる、信頼のおける友人であるヨーゼフ・ワイデマイアーがかなり頻繁にケルンに赴き、同盟の活動を新たな中央指導部と相談したことはきわめて重要な意味をもつと評されねばならない。ワイデマイアーの最初のケルン旅行が1850年12月の『新ドイツ新聞』の発禁直後になされたことは、これまで未公開の彼がマルクスに宛てた1850年12月28日付手紙から分かるとおりである。<sup>12</sup>

まず、新たな中央指導部は1850年12月1日付の呼びかけにおいて同盟班すべてに姿を現した。この呼びかけは同盟の諸班に第一にヴィリッヒ／シャッパー派の分離を伝え、この派の行動に反対の旨を表明した。呼びかけは「あらゆる理論的活動を停止する」と表明したこの派の立場に精力的に反論した。それとともに呼びかけの中ではっきりと述べられているのは、この派には労働者階級を勝利に導く能力のないことが無条件で証明されたということ、またそのような立場は結局、労働者階級を裏切ることになるに違いないということである。そこにはこうある。すなわち、「したがって、見かけはまことに独占的に「純粹プロレタリアート」の利害を代表するこれらの人々が、/80/フランス人、ポーランド人およびハンガリー人たちと共同して民主主義・社会主義委員会名義で発表した最近の宣

言において、ただ革命という空文句を突然がなりたてるだけであり、小ブルジョア的、社会民主主義的共和国の先駆けと自称しているのは、実際またまったく当然のことである。というのは、これによってプロレタリアートは運動の時期にも自身のかつての非政治的立場に引き戻されることになるだろうからである。つまり、プロレタリアートは、またしても他の一階級の利害のために闘争に呼び込まれ、その後自身勝利の果実を騙し取られることになるだろうからである。」

[42] したがって、同盟の新たなケルン中央指導部はその活動において、レーニンが後に「革命的理論なしには革命的運動もあり得ない」と表現した理解から出発した。彼らはマルクスおよびエンゲルスによって起草された「1850年3月の同盟への中央指導部の呼びかけ」を同盟の今後の活動の基礎と呼んだ。それについては、すなわち、「われわれが従わなければならない政策は、繰り返すが、前もって示されている。というのは、それは今年のロンドン中央指導部の第一の呼びかけに含まれているからである。したがって、この後者こそが、われわれが……支部および班すべての討議に委ねるものである。」特に、「プロレタリア党のブルジョア民主主義者に対する関係」を明らかにしている箇所が指示されている。続いて、「労働者協会がなお存続するところならどこでも、そこでプロレタリアートの立場を論じた呼びかけの箇所の内容を討議に付すこと」が求められている。

同盟の状態を描写した後、呼びかけは次のような結論に達する。すなわち、「これまで同盟

<sup>12</sup> 未公開書簡、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン研究所（モスクワ）〔1850年12月28日付カール・マルクス宛ヨーゼフ・ワイデマイアーの手紙、MEGA<sup>2</sup>, III/3, S. 713f.; BdK, Bd. 2, S. 355f.〕。その手紙にはこうある。すなわち、「ケルンへの小旅行から戻った。」

の利害はあまりにもわずかの精力で追求されてきたこと、最近のドイツに支配的な全般的意気消沈は同盟を拡大し強化するためにも最も不都合な結果であったこと、とりわけ宣伝が許しがたい形のまま放置されていたこと」。呼びかけが同盟の今後の活動を成功させるための保証と見ているのは、「われわれには確固たる組織および確固たる党綱領があり、それらが小ブルジョア民主党に欠けているものをわれわれに結び付ける」点である。

さらに呼びかけは、中央指導部と同盟諸班との間の状態を明らかにし、より良い組織的結びつきを作り出すために、4名の特使を派遣することについて伝えている。第一の特使はワイデマイアーであった。それは、これまで未公開の往復書簡および後のレーザー陳述から判明する。ワイデマイアーは [43] 南ドイツに、とりわけニュルンベルクとバンベルクに赴いた。彼はフランクフルト地区に属することになる新たな諸班を創設した。1850年12月1日付の呼びかけはそれについてこう述べている。「そもそも万事が同盟には南ドイツに確固たる足場はまだほとんどないということを物語っていたので、われわれはそこに名目的にだけ存在する班をすべて当分の間フランクフルト地区に帰属させ、この地区に南ドイツの諸事情を特に検討し評価することを委任した。」<sup>13</sup>

/81/ 呼びかけによれば、第二の特使はライプ

ツイヒ地区を訪れ、ベルリンにも短期間滞在した。それは化学者のオットーであったが、彼は適任ではなかったことが分かった。そのためノートユングが同様にベルリンとライプツイヒへ特使としての旅を企てたが、彼はライプツイヒで1851年5月10日に逮捕された。共産主義者同盟のためのノートユングのベルリンでの活動は、彼が逮捕された際にもっていた二通の手紙から読みとれる。一通目は、ケルン中央指導部のメンバーであるハインリヒ・ビュルガースが1850年12月27日にノートユングへ宛てた手紙である。手紙でビュルガースはベルリン行を喜び、同盟にとってベルリンの労働者たちが重要であることを指摘した。ビュルガースはこう書いた。「われわれを非常に喜ばせたのは、君がベルリン潜入に成功したこと、君が勤勉になったことだ。それにわれわれは満足している。というのもわれわれは周囲の連中をよく知っているからだ……[44] 君も同様に訪れる必要のある機械技師たちはベルリンで最良の労働者と呼ばれている……」<sup>14</sup> ノートユングがもっていた二通目の手紙では、彼はケルンの同盟員ベッカーから警察の追及を警告される。すなわち、「君もきっと知っていることだろうが、ヒンケルダイ（ベルリン警察長官—K.O.）が君を政治の評判を落とす者の一人としてそのブラックリストに載せた。……君がわずかでも目立つや否や、君は終わりだ。したがって、用心して、付き合いを欠

<sup>13</sup> ZStAM, Anklageschrift, Rep. 77, Tit. 505, Nr. 16, vol. 2. [BdK, Bd. 2, S. 328.] 1850年12月1日の呼びかけはケルンの被告たちに対する最初の起訴状の6～9ページに含まれている。この起訴状には同盟の呼びかけのすべてが収められている。起訴状で公表された1850年3月の呼びかけおよび1850年6月の呼びかけの本文はエンゲルスが1885年に調べたこれらの呼びかけの版本の本文と一致している。起訴状の1850年12月1日の呼びかけも正確に再現されているとみなされなければならない。本文は Radus-Senkovic 論文で再現されている1850年12月1日の呼びかけの内容とも一致している。

<sup>14</sup> Wermuth / Stieber, Die Communisten-Verschwörungen des 19. Jh., T. 1, Berlin 1853, S. 103-133; siehe auch ZStAM, Anklageschrift, S. 43. [BdK, Bd. 2, S. 349f. この資料集によれば、この手紙の前半部はレーザーの書いた部分と認定されている。]

いてまったくかまわないいわゆる民主主義者たちの党派の居酒屋を避けたまえ。君がやることを他の人びとの仲介を通じて行いたまえ。自分自身を危険にさらさないことが党に対する義務だ……」<sup>15</sup>

第一の手紙で言及されたベルリンの機械工たちは階級意識ある労働者として知られていた。そのため、彼らはプロイセン警察からのさまざまな嫌がらせを被らねばならなかった。著名な文筆家ファルンハーゲン・フォン・エンゼはその日記の1851年3月9日の項に次のような注目すべき当時典型的であった出来事を記した。すなわち、機械工たちは1851年3月8日、シェーンハウザー門前のある居酒屋で多数のお客を招き舞踏会を催していた。「ダンスの最中に参加者たちは警官隊とともに押し入ったパツケ隊長(Hauptmann Patzke)によって妨害された。女性たちは別室に行くことを命じられた。男性たちは皆逮捕され、真夜中に警察署へ引っ張って行かれ、そこで彼らは実名で調書を録られ、翌日の3時から4時にかけて釈放された。180名以上もが！」<sup>16</sup>

[45]/82/ 第三の特使の使命を、呼びかけは、「フランクフルト地区が含まれ、今まで堅固な

組織化と活発な宣伝活動にひたすら耐え抜いているライン州を訪れること」と述べている。全部で11の班を擁するケルン地区およびフランクフルト地区は、同盟員への呼びかけにおいて「手本であり模範であるとして」名を挙げられていた。<sup>17</sup> 呼びかけによれば第三の特使としてこの使命を担当する者の名前は決まっていなかった。しかしながら、ライン州で同盟を建設する際の最大の功績がケルン地区と緊密な共同作業をしていたヨーゼフ・ワイデマイアーにあることはなんの疑いもありえない。ワイデマイアーがかなり頻繁にケルンに赴いていただけではない。レーザーは、ワイデマイアーが種々の同盟班を訪れた結果を聞くため、1850年12月にも4日間ワイデマイアーのところにいたことを伝えている。<sup>18</sup>

呼びかけではさらに第四の特使が話題になっており、「シュレージエンに至るまでの北ドイツおよび東北ドイツ」を訪れるはずであった。呼びかけはこの旅についてまだ何も伝えることはできなかった。後のレーザー陳述によれば、ヴェストファーレンおよび北ドイツに赴く依頼を受けたのはノートユングであった。<sup>19</sup>

同盟のケルン班は、ロンドンで1850年9月15

<sup>15</sup> Ebenda.

<sup>16</sup> Varnhagen von Ense, Karl August, Tagebücher, Bd. 8, Zürich 1865, S. 93. ファルンハーゲンは1851年7月4日のこの日記の記述で、階級対立において明らかに労働する民衆の側に立つ。彼は書く。すなわち、「私は1848年以前には確かに人民の友であり自由の友であったが、しかし本当の民主主義者ではなかった。つまり、私はあらゆる政治的・市民的救済が上から来るのを見、それを、そこから期待し求めることで満足していたようなものである。しかしながら、1848年がすべてを変えた。人民が高貴で偉大であり、領主および上流階級は下劣で、臆病で、背信的であることが証明された。それ以来、粗野および悪徳から教養が生じ得るという希望はもはや存在しない。それ以来、残酷な暴力、恥ずべき奸計が猛威を振るっており、それ以来、決着するまで戦い抜かれなければならない戦争が続いている。」

<sup>17</sup> ZStAM, Anklageschrift, S. 7f.

<sup>18</sup> StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Tit. 94, Lit. R, Nr. 208. [Aus den Aussagen von Peter Röser von 1853/1854 über den Bund der Kommunisten nach der Revolution von 1848/49. Januar 1850 bis Mai 1851, in: BdK, Bd. 2, S. 458では「一泊 (eine Nacht logieren)」。]

<sup>19</sup> Siehe ebenda. [BdK, Bd. 2, S. 463ff.]

日にまとめられた決定に則って新たな規約をも起草していたが、それを1850年12月1日の呼びかけに同封した。同盟の目的について、[46] この規約の第1条にはこう定められている。すなわち、「共産主義者同盟の目的は、宣伝および政治的闘争のあらゆる手段による、旧来の社会の粉碎、プロレタリアートの精神的、政治的および経済的解放、共産主義革命の遂行にある。同盟は、つねにプロレタリアートの革命的な力すべてを統一し、かつ組織化しようと努めることによって、プロレタリアートの闘争が経なければならない種々の発展段階において、つねに運動全体の利害を代表する。同盟は、秘密であり、プロレタリア革命がその最終目標を果たすまでは、解散することができない。」<sup>20</sup>

これについて述べられるべきは、冗漫な表現からは起草者たちに必ずしも明晰さと確かさのあることが語られていないことである。/83/カール・マルクスおよびフリードリヒ・エンゲルスが起草に関与していた1847年12月8日付の共産主義者同盟の最初の規約においては、同盟の目的は簡潔かつ明瞭に表現されている。呼びかけの若干の表現からもまた、新たなケルン中央指導部には、エンゲルスの言によれば、とかく美辞麗句ないしは深遠な言葉でもったいぶるビュルガースのような人物がいたということが認識されるべきである。

新たなケルン中央指導部の最初の諸措置にマルクスおよびエンゲルスは総じて満足した。1850年12月19日にイエニー・マルクスはエンゲルスに宛ててこう書いた。「ヴェリヒおよびそ

の一味に対するケルンの破門状（すなわち、ヴェリヒによる同盟の分離についての新たな中央指導部の呼びかけ—K.O.）は、新たな規約および回状等と共に、昨日載せられました。ケルンの人々はこの度はこれまでになく精力的かつ活動的であり、また下劣な一味にあくまで断固として反対しました。」<sup>21</sup>

新たな中央指導部は、確認される限りにおいては、まず同盟のケルン班の三人のメンバーによって構成された。すなわち、マルクス [47] およびエンゲルスの親しい友人であり、収監中に罹患した結核で1855年に亡くなった、医師のローラント・ダニエル博士、紙巻煙草労働者のペーター・ゲルハルト・レーザー、および1848/49年の『新ライン新聞』の編集員であり、後に自由主義的な進歩党党员で、ドイツ帝国議会議員となった、ハインリヒ・ビュルガースである。<sup>22</sup> フランツ・メーリングは、ハインリヒ・ビュルガースについて「マルクスおよびエンゲルスがまったく何も言及していない」と記しているのに対して、医師のローラント・ダニエルについては、彼はおそらく「ケルン中央指導部の文字通り指導的首脳」であったと述べている。<sup>23</sup>

紙巻煙草労働者のレーザーについてはこれまでほとんど顧みられることがなかった。彼は1849年以来、ケルン労働者教育協会の会長であり、全ドイツ規模で組織された最初の組合の一つであるドイツ紙巻煙草労働者連合の副会長であった。レーザーは主として労働者階級における共産主義者同盟の影響力の強化に貢献した。

<sup>20</sup> ZStAM, Anklageschrift, S. 9. [BdK, Bd. 2, S. 331f.]

<sup>21</sup> Marx, Karl / Engels, Friedrich, Briefwechsel, Bd. 1, Berlin 1949, S. 151. [MEW, Bd. 27, S. 612.]

<sup>22</sup> Siehe Rados-Senkovic.

<sup>23</sup> Marx, Enthüllungen, S. 162f.

したがって、彼は後のいわゆる大逆罪裁判においても最も危険な人物の一人として扱われ、懲役6年の刑を宣告された。

レーザーは1850年初め以来、共産主義者同盟の構成員であった。後に1851年8月1日に彼は、ケルンでの予審判事による尋問に際してこう表明した。「私は、労働者教育協会に共産主義思想を導き入れるため、総じて講演によってこの原理を広範に普及するため、労働者教育協会を利用したことは否定しない」<sup>24</sup>

彼は、ドイツ紙巻煙草労働者連合の副会長としての自身の活動をも、同盟の中央指導部の構成員としての自身の活動と結びつけた。レーザーは、1851年4月、したがってその逮捕の直前に、ライン州の紙巻煙草労働者協会のいくつかを訪れた。その旅は、/84/3月末にハーナウの協[48]会の多数の会員が逮捕されており、裁判にかけられることになっていたので、きわめて重要であった。諸家族を救済し、諸協会を新たに設立することが肝要であった。<sup>25</sup>

ケルン裁判所がケルン共産党裁判終了後、プロイセン法務相ならびにプロイセン内務相にたいして被告人たちについて伝えた報告にはこうある。すなわち、「私は、審理を通して有罪とされた人びとを知る機会を得た限りでは、最もたちの悪いのはとりわけレーザーなる者であると見ました……彼は1848年以来その逮捕に至るまでその活動をほとんどもっぱら同盟の活動に

捧げており、またその際には粘り強さと精力とを示しました。ちなみに、彼はまったくわずかの教育しかない人間ですが、しかしそれにもかかわらず労働者たちのなかで敬意を集め大きな影響力を得る手際には欠けるところがないのです。」

ビュルガースに関してはこの報告では引き続いてこうある。すなわち、「ビュルガースはかなり教育のある男である……彼はきわめてうぬぼれが強く、とりわけその弁舌の才にうぬぼれているように思われ、自身の能力をきわめて高く評価している。彼はおそらくドイツにおけるあらゆる国家諸関係の夢想されている変革に際して非常に傑出した立場をとり得ると信じていた。」<sup>26</sup>

後の国民自由党のケルン市長であり、プロイセン上院の議員となったヘルマン・ベッカー博士はおそらく1851年にはなおまだ同盟のケルン中央指導部の一員であった。少なくとも彼はケルン中央指導部と緊密な関係にあった。レーザー陳述によれば、共産主義者同盟へのベッカーの受け入れは満場一致では[49]なかった。<sup>27</sup> マルクスはベッカーについて1852年12月7日にワイデマイアーに宛ててこう書いた。「……彼は、理論的な教養について言えば、きわめて非力だが、しかし卑小な野心はかなりたくましい……。」<sup>28</sup> 大逆罪裁判における彼の振舞いは共産主義者の態度として相応しからぬものであった。ベッカーは小ブルジョア民主主義運動出身であった\*。

<sup>24</sup> StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Tit. 94, Lit. R, Nr. 208.

<sup>25</sup> Ebenda, Röser an Ferdinand Lassalle, 31. 3. 1851. [BdK, Bd. 2, S. 400f.] レーザーとラサールは確かに結びつきがあったが、しかし、レーザーはラサールに対して不信を抱いており、そのためラサールを共産主義者同盟から遠ざけていた。ラサールに対するこの不信については、Franz Mehring, in: Enthüllungen, S. 165をも参照。

<sup>26</sup> StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Tit. 94, Lit. R, Nr. 208.

<sup>27</sup> Siehe ebenda.

<sup>28</sup> Marx, Enthüllungen, S. 145f. [NEW, Bd. 28, S. 563; MEGA<sup>2</sup>, III / 6, S. 106; Apparat, S. 739. なお、いずれもアードルフ・クルス宛となっている。]

\*この一文は論文集では削除されている。

1851年3月31日の「マインツ大公政府委員会宛のヘッセン大公省」の文書では、ベッカーはあの小ブルジョアという名で呼ばれ、「民主主義部門の進行中の再組織の支柱と」名付けられている。<sup>29</sup>

ケルンの『新ライン新聞』の発禁以来、ベッカーは/85/『西ドイツ新聞』を編集し、それを『新ライン新聞』の後継紙に見せようと努めていた。彼は『新ライン新聞』の定期購読者に、「払い込んだ四半期分の購読料の補償として『西ドイツ新聞』を7月1日まで無料で」提供することを提案した。<sup>30</sup> しかしながら、『西ドイツ新聞』は小ブルジョア民主主義の報道紙であって、『新ライン新聞』とは比べようもなかった。1849年6月2日にワイデマイアーは『新ドイツ新聞』にマルクスが起草した声明を公表した。すなわち、先に発禁となった『新ライン新聞』の編集者たちには、ケルンにおいて『西ドイツ新聞』という名称で発行されている小新聞となんの協力関係もない、と。<sup>31</sup> しかしながら、ベッカーは彼の新聞を有名にしようとする試みを止めなかった。特に彼は同盟員を編集部に引き入れようと努めた。[50] 1850年3月にハインリヒ・ビュルガースは彼に、その編集部に加入しようとして計画している『『西ドイツ新聞』の政治的指導のための党の指示を与えて』くれるよう

マルクスに依頼した。しかしながら、マルクスは彼に思いとどまるよう助言した。<sup>32</sup>

ラサールは、すでにその頃、政治運動において一定の役割を演ずる機会を求めており、ビュルガースに以前から若干の論説を送っていた。ビュルガースは1850年4月11日に「新聞のこれまでの立場が変らなかった」ために編集部に入ることができなかったという説明を付けてそれらを送り返し、こう付け加えた。「それにもかかわらず、もし私が、あり得ないわけではないことだが、党の事情でこの新聞に書くのを決心したにしても、それは半自由拘禁囚として、すなわち編集部から独立してはいるものの、しかしやはり編集部に対してはなんらの影響力もなしになされるのである。」<sup>33</sup>

しかし、紙巻煙草労働者レーザーの後の陳述によれば、ビュルガースは、同盟中央指導部のケルンへの移転後にやはり『西ドイツ新聞』の編集部に加わった模様である。<sup>34</sup>

『西ドイツ新聞』によって指導的役割を確保しようとするベッカーの目論見は、「彼は同盟を彼の個人的目的のための手段としてのみ利用しようとした」と認定しているプロイセン法務相へのケルン裁判所の報告においてと同様、彼の性格を描き出している。<sup>35</sup>

ワイデマイアーは、すでに何度も言及した通

<sup>29</sup> StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Tit. 94, Lit. B, Nr. 321. Acta des Polizei-Präsidenten zu Berlin, bestr. den früheren Herausgeber der „Westdeutschen Zeitung“, Herrn Dr. Hermann Heinrich Becker, 1851.

<sup>30</sup> Westdeutsche Zeitung (Köln), Nr. 2, 26. 5. 1849; Nr. 3, 27. 5. 1849.

<sup>31</sup> Die Neue Zeit, 25, 1906-07, 2, S. 18.

<sup>32</sup> Karl Marx, Chronik seines Lebens in Einzeldaten, Moskau 1934, S. 86. [岡崎次郎, 渡辺 寛 訳『マルクス年譜』(青木書店, 1960年) 106ページ]

<sup>33</sup> Ferdinand Lassalle. *Nachgelassene Briefe und Schriften*, hrsg. v. Gustav Mayer, Bd. 2, Stuttgart / Berlin 1923, S. 32.

<sup>34</sup> Siehe StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Tit. 94, Lit. R, Nr. 208b. [Aus den Aussagen von Peter Röser von 1853/1854 über den Bund der Kommunisten nach der Revolution von 1848/49. Januar 1850 bis Mai 1851, in: BdK, Bd. 2, S. 445-483, S. 464.]

<sup>35</sup> Ebenda, Nr. 208.

り、最初の同盟の特使として1851年の初めに同盟の組織者としての活発な活動を繰り広げた。さらに、彼は、同盟の最良にして最強の地区であるケルンと並ぶ、ニュルンベルクに至るまでの南ドイツのすべての班が所属するフランクフルト地区の議長であった。その結果として、ワイデマイアーはしばしば [51] 旅に出た。しかし、彼の定住地は、追放されたにもかかわらずフランクフルトのままであった。/86/ワイデマイアーは幾度もケルンにやって来た。紙巻煙草労働者レーザーが、後にシュテッティーン刑務所で1854年2月12日に尋問された際、こう明らかにした。「1851年の2月か3月に、フランクフルトから追放されたワイデマイアーが何度もケルンにやって来た。」<sup>36</sup>

ケルンでの中央指導部メンバーとワイデマイアーとの協議で重要な位置を占めていたのは、同盟の組織上の事柄と並んで、新たな雑誌を創刊することであった。それについての相談は『西ドイツ新聞』の事務所でもっぱらベッカーおよびビュルガスと行われた。雑誌は単純な名前『新雑誌 (Neue Zeitschrift)』となるはずであった。1851年4月5日にベッカーはこの計画をマルクスに伝え、彼に寄稿を依頼した。1851年4月9日にマルクスは寄稿を約束した。<sup>37</sup>

マルクスとエンゲルスはこの計画に大きな期待を抱いた。1851年5月9日にエンゲルスはマルクスに宛ててこう書いた。「われわれはなにしろ間もなくまた、われわれが出しているよう

に思われることなく、われわれが必要とする場合にはあらゆる攻撃に反論できる機関紙をもつことになる。これがわれわれの評論よりも計画されているケルンの人々の月刊誌の優るところだ。われわれがすべてを好人物 (bonhomme)<sup>38</sup> のビュルガスに任せれば、彼もいくらか思慮深くなるに違いない。」<sup>39</sup>

1851年5月半ば、詩人のフライリヒラートがロンドンに到着した。マルクスは1851年5月21日にエンゲルスへこう書いた。すなわち、「彼はドイツからきわめて良い知らせをもたらした。ケルンの連中はいたく活動的だ。彼らの受任者たちが9月以来旅をしている。彼らにはベルリンにきわめて良い代理人が二人いる……」<sup>40</sup>

[52] 雑誌の計画は実現寸前であった。1851年5月初め、ビュルガスがケルンの中央指導部からヴェストファーレンへ、そしてそこからハノーファーを経てベルリンへ旅した。ハノーファーで彼はベッカーが招集を手配していた民主主義者たちのある会議に参加することになっていた。しかし、その他に、この旅には同盟諸班を訪問するとともに、計画されていた雑誌の定期購読者および記事の寄稿を募るという目的があった。この旅でビュルガスは5月半ばドレスデンにおいて逮捕された。<sup>41</sup> ビュルガスの逮捕およびザクセンでのノートユングの逮捕に続いて、ケルンでベッカー、ダニエルス、レーザー等々が逮捕された。

<sup>36</sup> Ebenda, Nr. 208b.

<sup>37</sup> Marx, Chronik seines Lebens, S. 105. [『マルクス年譜』132ページ]

<sup>38</sup> Biedermann.

<sup>39</sup> Marx / Engels, Briefwechsel, Bd. 1, S. 240. [MEW, Bd. 27, S. 253.]

<sup>40</sup> Ebenda, S. 246. [Ebenda, S. 262.]

<sup>41</sup> レーザー陳述参照\* ; StA Potsdam, Rep. 30, Berlin C, Tit. 94, Lit. R, Nr. 208b. [BdK, Bd. 2, S. 445-483, S. 464に相当か (?)]

\*この一文は論文集では削除。

〔付記〕本稿は2010年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究課題名「『共産党宣言』の起草者名の普及史」(課題番号21530182)の研究結果の一部である。